

海外派遣実績報告書

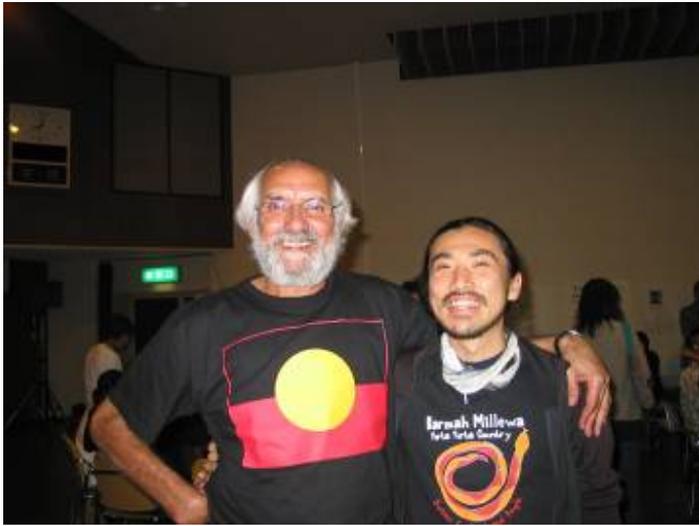
所属（本学） 文化科学研究科地域文化学専攻
氏名 友永 雄吾
海外派遣先国 オーストラリア連邦
海外派遣先大学 メルボルン大学
海外派遣期間 2008年8月21日－9月19日
報告年月日 2008年10月15日
報告年月日 2008年10月15日

報告書内容

メルボルン大学は、1853年に設立されたシドニー大学に続くオーストラリアで二番目に長い歴史を誇る大学で、ヴィクトリア州の州都メルボルン市内にメイン・キャンパスを持ち、ヴィクトリア州内にその他7つのキャンパスを有する名門校である。本大学は文化系9学部と理科学系6学部を持つ総合大学で学生数は約36000人、内5100人が留学生で、その内半分が英国とアイルランド、また30パーセント以上がアジアからの留学生で占められている。

アボリジナル研究に関しては「**Australian Indigenous Studies**」と題するコースが文学部の人類学、地理学および環境学研究科の中に設置されており、学部課程から博士課程までの学生を受け取っている。

報告者は、本大学の政治学、犯罪学並びに社会学部にて教鞭を執る、ウェイン・アトキンソン博士の受け入れで、今回の海外派遣を遂行した。アトキンソン博士と報告者との出会いは、2005年の夏に、博士が所属するオーストラリア南東部に居住する1先住民集団であるヨルタ・ヨルタの土地権回復運動の研究を遂行するための予備調査を実施して以来はじまる。その後、博士論文を完成させるため計画的に、2006年7月から9月（平成18年度海外派遣事業活用）、2007年4月から10月、2008年1月から4月（平成19年度笹川研究助成活用）まで、約14ヶ月間、ヨルタ・ヨルタ集団の人々の本来の土地であるバルマ・ミラワ森林を中心に長期調査を実施し、その際、博士から多くのご指導を受けた。また、2008年7月に北海道の二風谷と札幌を中心に開催された先住民族サミット・アイヌモシリ2008に、オーストラリア先住民の代表として本サミット主催者であるアイヌ民族代表により、アトキンソン博士が招聘され、報告者に対して博士より通訳として、また共同発表者として参加してほしいとの要請があった。このため、オーストラリア国内のみでなく、日本においても公私ともにアトキンソン博士との友好関係を築いてきたことが、今回の海外派遣受け入れに繋がった。



【北海道平取町二風谷にて撮影：ウェイン・アトキンソン提供】

博士論文完成のための補足調査が目的である本派遣は、1ヶ月の短期滞在であった。このため3ヶ月間滞在できる通常の旅行ビザ（ETAS）2,000円を購入し入国した。滞在中、大学図書館と院生室の使用をアトキンソン博士より承認してもらったが、パソコン利用に必要なパスワードが短期滞在学生のため入手できず、友人学生のパスワードを借用することになった。

滞在当初1週間はアトキンソン博士宅にて滞在し、メルボルン市内を中心に、2007年よりオーストラリア南東部マレー川流域を舞台として繰り返されている河川と森林の資源利用と管理にともなう政策に焦点を当てた政府刊行物を収集した。これに加え、本テーマに関わる、都市部の環境NGO職員やメルボルン大学学生と面会し、それぞれの見解を伺った。また、大学授業への登録は必要なかったが、アトキンソン博士が担当する「Australian Indigenous Studies」の2講座にゲストとして参加し、北海道で開催されたサミットの概要を博士とともに伝える機会があった。さらに、メルボルン大学生を中心に2006年より運営されているダルニヤ・アクション・グループに所属する学生に対するアトキンソン博士からのブリーフィングに参加した。また、ヨルタ・ヨルタ集団の土地や川の資源管理など、政策決定のための中心機関であるヨルタ・ヨルタ・ネイション法人の月例会にアトキンソン博士と参加し、ここでも、北海道先住民サミットに関する報告を行った。さらに、地域住民が中心に運営される環境NGOsの年次会議にもアトキンソン博士と参加し、それぞれに異なる川と森林の資源管理に関する見解について伺った。

2週目より、マレー川とバルマ・ミラワ森林における川と湿地帯の資源管理に関する調査を実施するため、メルボルン市内から約250キロ北上した所に位置するモアマ小都市へ向かった。9月2日より15日まで本小都市に住む友人宅で滞在した。但し、モアマ小都市より、バルマ・ミラワ森林までは25キロほどしか離れていないにもかかわらず、公共交通機関が整備されていない。このため、メルボルン市内よりレンタカーを借り調査を実施した。レンタル料金は2週間で58,000円（1ドル=100円）さらにガソリン代はおよそ45,000円（1ドル=100円）。本調査の最大の目的は、2008年7月26日にヴィクトリア州政府より、マレー川の水質や水量と本河川沿いに点在する州立公園や自然保護区などに生息する動植物の状況を改善するため、調査を委託されたヴィクトリア環境評価委員会（VEAC）の最終勧告に対する地域住民、先住民、

並びに国内・国際 NGOs と都市部の知識人の見解を知ることにあつた。これまで、地域住民を除くその他諸利害関係者の見解に焦点を当て調べてきたため、今回は地域住民の本勧告に対する見解に絞って調査を実施した。先ず、地方新聞社オフィスへ出向き、本新聞者記者に対して質問票に基づくインタビューを実施した。その後、当該地域選出の国民党議員、本勧告に反対を表明し、代替案を作成し、それを州政府へ提出した地域住民で構成されるリバー・レッド・ガムと環境のための連合(RREA) (主要団体：バルマ森林保存連合、リバー・レッド・ガム材木コミュニティ協会、バルマ森林牛家畜所有者協会) の代表者、さらに当該地域にて宿泊施設を営むオーナー、カヌーのレンタルやレクリエーションに関するビジネスを運営するオーナーに対し、同様のインタビューを実施した。



【地方新聞社オフィス前：友永雄吾撮影】

3 週目は、引き続き、バルマ地方町で郵便局を兼ねる日常雑貨店オーナーや家庭用焚き火としてレッド・ガムの枝を薪として収集する地域住民、さらに当該地域に約 150 年前の植民地期当に先祖が定住した大牧場主に対し質問票に基づくインタビューを実施した。また、ヨルタ・ヨルタの女性長老に対して彼女のライフ・ヒストリーに関するインタビューを実施した。地域住民やヨルタ・ヨルタ女性に対するインタビューに加え、バルマ州立公園を管轄する州政府機関である持続可能な環境に関する省 (DSE) や、本章の下に設置されているパークス・ヴィクトリアの職員に対してもインタビュー調査を実施した。2007 年 8 月よりバルマ州立公園内では人為的の火付けによるモニタリングが実施されている。インタビュー調査をすると同時に、本モニタリングにも参加した。更に、週末には国立公園運営の現状を調査するため、ヴィクトリア州に既に設置されている約 40 の国立公園の内 5 カ所を訪れた。先ず、標高 1000 メートルから 2000 メートルの山々が連なるアルプス地域にあるマウント・バッファロー国立公園とマウント・パロット国立公園、ついで針葉樹の大木に覆われたヤラ・レンジャー国立公園とレイク・ヴィクトリア国立公園、さらに湖の景観が美しい、レイク・エルドンを訪れ、それぞれの公園の特徴を肌で感じると同時に、これまでの緊張感に包まれた調査中心の生活から解放され、心身共にリフレッシュすることができた。また、ヨルタ・ヨルタ集団が植民地化の過程で強制移住させられた場所、クランダーク保護区へも赴き、唯一現在も残る墓地と、1980 年代に先住民の学生を対象に開設されたワラワ・カレッジ (高等学校) を見学した。



【マウント・バッファロー国立公園から眺めるオーストラリアン・アルプス：友永雄吾撮影】

4 週目は、再びモアマ友人宅へ戻り、既にインタビューを実施した大牧場主にバルマ森林内の思い出の場所を案内してもらった。また、1980 年代初頭、ヨルタ・ヨルタに 99 年リース地としてニューサウスウェールズ州政府より返還されたクメラグンジャ・アボリジナル・コミュニティの住宅管理委員会取締役で、自らヨルタ・ヨルタ・ネイション法人を構成する 16 家族の内の 1 つ、バンガロンと自称する長老に対しインタビューを実施した。バルマ森林近辺での研究を終え、メルボルン市内のアトキンソン博士宅に戻り、出国日までメルボルン大学図書館を中心に政府刊行資料を収集した。



【マレー川から眺めるクメラグンジャ・アボリジナル・コミュニティ：友永雄吾撮影】

インタビュー調査を行った人数

- ① 非先住民（都市の環境 NGO 職員：男性 1、メルボルン大学学生：女性 4）
- ② 地域住民（リバーリン・ヘラルド新聞社記者：女性 1、国民党議員：男性 1、RRGEA 代表：男性 1、宿泊施設オーナー：女性 1、郵便局を兼ねる日常雑貨店オーナー：女性 1、日常雑貨店オーナー：女性 1、カヌーレンタル並びにレクリエーション運営者：男性 1、女性 1、薪収集人：男性 1、大牧場主：男性 1）
- ③ 政府関係者（DSE 職員：男性 1、パークス・ヴィクトリア職員：男性 1）
- ④ 先住民（ヨルタ・ヨルタ長老：女性 1、バンガロン長老：男性 1）

渉猟した政府公刊物

- ① Colin Leitch, 1989, *Towards a Strategy for Managing the Flooding of Barmah Forest*, Benalla Rgion, DCRL.
- ② DCFL, 1990, *Proposed Barmah Management Plan: Barmah State Park, Barmah State Forest*, Benalla Region National Parks and Wildlife Division, Lands and Forests Division.
- ③ Department of Conservation and Environment, 1992, *Barmah State Park and Barmah Forest Management Plan*, East Melbourne, Vic, DCE.
- ④ Department of Sustainability and Environment, 2003, *Forests Fact Sheet: River Red Gum*, Alecandra, DSE.
- ⑤ Department of Sustainability and Environment, 2003, *Barmah Forest Ramsar Site: Strategic Management Plan*, East Melbourne, DSE.
- ⑥ Department of Natural Resources and Environment, 2002, *Forest Management Plan for the Mid Murray Forest Management Area*, East Melbourne, DNRE
- ⑦ Fahey, Charles, 1987, *Barmah Forest: a History of the Barmah Forest*, DCFL.
- ⑧ Land Conservation Council, 1983, *Report on the Murray Valley Area*, Melbourne, Vic, LCC.
- ⑨ Land Conservation Council, 1985, *Final Recommendations: Murray Valley Area*, Melbourne, LCC.
- ⑩ Massola, Aldo, 1970, *Aboriginal Mission Stations in Victoria: Yelta-Ebenzer-Ramahyuck-Lake Condah*, the Hawthorn Press.
- ⑪ Morgan, Ronald, 1952, *Reminiscences of the Aboriginal Station at Cummeragunga and its Aboriginal People*, NSW.
- ⑫ Murray-Darling Basin Commission, 2000, *The Barmah-Millewa Forests Water Management Strategy*, Canberra: MDBC
- ⑬ Murray-Darling Basin Commission, 2005, *Survey of River Red Gum and Black Box Health Along the River Murray in New South Wales*, Victoria and South Australia, Canberra: MDBC
- ⑭ Murray-Darling Basin Commission, 2006, *The Barmah-Millewa Forest Icon Site Environmental Management Plan 2006-2007*, Canberra ACT, MDBC.
- ⑮ R.H. Matthews, 1904, *note books and correspondence*, Nole Book 6
- ⑯ Rivers & Red Gum Environmental Alliance, 2008, *Conservation and Community: A Community Plan for the Multiple Use Management of Public Lands in VEAC's River Red Gum Forests Investigation Area*, RRGEA.
- ⑰ Thos, James & Matthews James, 1897, *Man – Making*, note.
- ⑱ VEAC, 2008, *Final Report: River Red Gum Forest Investigation*, VEAC.
- ⑲ VicRoads, 2001, *Murray River Crossing at Echuca/ Moama: Environment Effects Statement/ Environmental Impact Statement Volume 1-3*, Vic, VicRoads.

海外派遣費用については、貸与されている日本学生支援機構第1種奨学金と国立民族学博物館リサーチ・アシスタント等で貯めた資金を生活費に当てた以外は、今回の派遣費用で全てまかなうことができた。殊に、アトキンソン博士宅とモアマ友人宅での宿泊は全て無料で受け入れて頂いた。

派遣先での語学に関しては、授業、研究、生活の全てにおいて英語が必須であった。また、TOEFL等の語学試験は2004年以降受験していないが、2005年から2008年まで約14ヶ月オーストラリアでの長期フィールド・ワークを実施したため、英語での研究の遂行と生活は、何ら大きな支障はなかった。ただし、今回の派遣で最も焦点を当てた研究は地域住民からの川と森の資源管理に関するインタビューであり、内容がかれらの日常生活に直結していたため、何名かの人々より警戒され、地域住民との関係がぎくしゃくする場面もあった。殊に、バルマ森林において製材業を営む職員からのインタビューを上手く遂行することができなかった。しかし

ながら、限られた資源と期間で男性9名、女性10名よりインタビューを実施できたこと、さらに政府刊行物等、19資料を渉猟できたことは、本調査の充実度を示している。従って、博士論文完成に向け、本海外派遣は不可欠なものとなった。

今後、本事業を活用した調査を考える学生の方々は、事前の計画と準備を怠ることなく、入念にすることをお勧めする。とりわけ、計画に関しては1つの仮説とその検証のみに固執することなく、いくつかの仮説を立て、それを検証するよう試みることが重要であると考え。こうすることで、現地で行き詰った際、時間を無駄にせず調査を実行することができる。報告者に限っては、2005年より継続して調査地に住む人々との信頼関係を築いていたため、ある集団や個人に警戒されたものの、これまでに信頼関係を築いてきた異なる集団や個人にアプローチすることで、警戒された集団や個人との関係を多少なりとも改善することができた。

最後に、本事業に報告者を送り出してくださった、総合研究大学院大学に深く感謝申し上げます。